

## 「レンガの話」

小石川の1年生は、毎年12月に英語のレシテーションコンテストとして、「The Three Little Pigs」を暗唱しています。まず各クラスの英語の授業でコンテストの予選が行われ、代表が選出されます。そして、各クラスの代表生徒たちによる学年全体のコンテスト本選が開催されます。

このコンテスト本選では、クラス代表の生徒たちはただ英文を正確に暗唱するだけでなく、表現豊かに聴衆にアイコンタクトをしながら、身振り手振り、歌を交えてのパフォーマンスのレベルを競い合います。時には黒板を叩いたり、足踏みしたりしながらのパフォーマンスもあり、ドラマティックにオオカミに対する子ブタの勝利を表現します。代表生徒たちのバラエティに富んだ表現力により、聴衆である他の生徒たちも同じ英文を何回も聞いているにも関わらず、聞き飽きることはありません。

さて、このお話でオオカミが吹き飛ばすことができなかつたのは、ご存知の通り3匹の子ブタが建てたレンガの家です。小さい頃にこの話を読み聞かせてもらった子供は、将来自分の住む家はレンガの家でないといけないと思います。しかし、日本の現在の一般的な家屋はレンガの家がめったにないし、自分の家もレンガではないので、オオカミがやってきたらどうしようと悩みます。

幼稚園や保育園の先生が、レンガの家でなくても大丈夫だと言ったり、お父さんがニホンオオカミはすでに絶滅して存在しないと言ったりして、やっと子供は安心できるようになります。しかし、レンガがとても頑丈で、オオカミのような外敵から身を守ってくれる建築資材であることが、すっかり子供には刷り込まれてしまうことになります。

レンガはいつ頃日本に伝わったのでしょうか。調べてみると、奈良時代に寺院建築で「磚(せん)」というレンガが用いられていたとありますが、大規模に生産されて建材として使用されるようになったのは、江戸時代末期以降のことです。幕末に製鉄のための反射炉が築かれ、その熱に耐えられる建材としてレンガが利用されるようになりました。

また、明治5年(1873年)に東京で大火があり、東京の不燃都市計画の一環として、銀座一帯がレンガによる街づくりが行われました。銀座レンガ街は明治10年(1878年)頃に完成していたということですから、当時の日本人が明治維新による新しい時代の到来を、レンガによって感じていたとしてもおかしくありません。

レンガを利用した建築は明治を通して行われ、文明開化の主要な建築はレンガによって

建立されていきました。代表的な例をあげるとすると、明治 23 年（1890 年）に完成した浅草の高層建築「浅草凌雲閣（浅草十二階）」、明治 27 年（1894 年）に完成した「三菱 1 号館」、大正 3 年（1914 年）に完成した「東京駅」などがあげられます。浅草十二階は復元されていませんが、三菱 1 号館と東京駅のレンガ建築は復元されているので、現在でもどんな建物であったかを知ることができます。

これらのレンガ建築の多くが大正 12 年（1923 年）の関東大震災で大きな被害を受け、東京における丈夫な建築物は、レンガからコンクリートに移っていくことになりました。

明治期にレンガによる建物を多く建てることができたのは、全国各地にレンガの製造工場がつくられたからです。東京から比較的近い場所でレンガ工場を今でも見学することができるのは、栃木県野木町にある野木町煉瓦窯です。私は以前テレビの旅番組で野木町煉瓦窯を見た記憶があります。このレンガ工場は、いわゆる「ホフマン式」といわれる生産形態の工場です。町のホームページによれば、明治 23 年（1890 年）から昭和 46 年（1971 年）まで、約 80 年間にわたって赤レンガを生産し続けました。

ホフマン式とは、窯を円形もしくは楕円形に配置して、一つの区画でレンガが焼き上がると、また次の区画に火を移してレンガを連続して焼く方式で、大量生産ができるようにした生産方法です。野木町煉瓦窯には 16 の窯があり、1 つの窯で 1 回に約 14,000 本、全ての窯を連続して使用した場合には約 22 万本赤レンガを生産することが可能だったといえます。昭和 54 年（1979 年）に国の重要文化財に指定され、さらに平成 19 年（2007 年）には、「近代化産業遺産群」の一つに選定されたとのことでした。

レンガ工場のことを、もう一つ付け加えると、明治初期の銀座レンガ街を建設するためのレンガ工場は、現在の東京拘置所の敷地内に建設されたホフマン式のレンガ工場だったということがインターネットを調べると出てきます。

レンガを使用している建物や文化財、遺構は、街の中を歩いていって見ると思いのほか多く存在します。例えば私が居住している荒川区では、荒川遊園の塀の一部に大正 11 年（1922 年）につくられたレンガ塀が残っていますし、都立荒川工業高校には、明治 12 年（1879 年）に操業した千住製絨所のレンガ塀が残っています。製絨所（せいじゅうしょ）とは、軍服や制服の生地を製造する工場です。明治初期に軍服や制服の生地を外国から輸入していたのを、国内生産へと切り変えるために建設されました。

小石川のある文京区にもレンガを使用している文化財は多数あり、インターネットで検索するとレンガ建築に興味・関心が高い人が、様々な建築や文化財、遺構の写真を撮影して、ブログ等に掲載していることが分かります。特に東大にはレンガ遺構が多く残っているようなので、そのうちに私も見に行きたいと思います。赤レンガの建物が多く残っている場所は、横浜や小樽の倉庫街のように全国でも有名な観光地となっているくらいなので、レンガ建築の美しさに魅せられる人も大勢いるのでしょう。

小石川の近所にある六義園もレンガ塀に囲まれています。六義園のレンガ塀はほとんどが補修されていて、東側の道路に面していない部分だけは古いままで残っています。レンガ塀の説明掲示板が南側の塀に設置されていて、第二次世界大戦以降に六義園の管理用に構築された旨が書かれています。明治期のレンガではないのが残念です。

実は、小石川の敷地の西側にもレンガ塀が残っています。インターネットを検索してみると、このレンガ塀は小石川が大正7年（1918年）に府立第五中学校として、伊藤 長七初代校長先生のもとで開校する前に存在していた巣鴨病院のものであると書かれているホームページがあります。もし、それが正しいのであれば、明治期の他のレンガ建築と同様に、どこかのホフマン式のレンガ窯で生産され、この地に持ち込まれて塀として使われたものということになるでしょう。

現在、小石川のレンガ塀は誰も注意を払いませんが、ひっそりと小石川の歴史の長さを伝えているように思います。